「風葉和歌集」の「よみ人しらず」歌・「題しらず」歌について

米田明美

序

「風葉和歌集」（以下「風葉集」と略称する）の構造について分析を行う上で、或は逆に「風葉集」の収載歌を基として散逸物語の復原を試みる上でしばしば問題となるのが、「よみ人しらず」と詠者名の記された歌、そして「題しらず」と詞書の付された歌である。この問題に関しては、小木喬氏[注1]・大槻修先生[注2]・神野藤昭夫氏[注3]により論究が重ねられてきた。

勅撰集などにおいての「題しらず」歌は、その詠じられた歌の事情や場が伝わらない場合、或は詠歌事情が明らかであっても撰集に当り当時の政治的状況を踏まえつつ敢えて「題しらず」とする場合などが考えられている。「よみ人しらず」歌も同様である。しかし「風葉集」は物語歌集であり、物語内容が存している限り詠歌事情が伝わらないということは考えられない。その背後に配列上の作為が存するのではないだろうか。何か「題しらず」「よみ人しらず」にしなければならない理由があるのではないだろうか。

以上のことを念頭に置き、各部の構成や配列、加えて各物語場面に返した場合等、種々の視点に立ち、「題しらず」「よみ人しらず」各歌について考察を加えてみたい。

○「よみ人しらず」歌について

「風葉集」には詠者名に「よみ人しらず」と付されている歌が二十八首[注四]見出される。この内現存物語歌は十三首である。（「落窪物語」六、「源氏物語」二、「有明けの別れ」二、「あさぢが露」一、「逢坂越えぬ権中納言」一、「はいずみ」一）まずこの現存物語歌を考察し、手掛りを得たい。

(1)「源氏物語」…二首

六条院にて池に舟うけて女房あまたのりてあそび侍ける中に

よみ人しらす　源氏

110春の日のうら、にさしてゆく舟はさをのしつくに花そちりける（春下）

中河のほとすき給ふとてひとめ御らんしける女の家を見いれたまふにほと、きすなきてわたるももよほしき

こえかほなれは　六条院御歌

177をちかへりえそしのはれぬ郭公ほのかたらひし宿の垣ねに

御かへし　よみ人しらす

178ほと、きすかたらふこゑはそれなからあなおほつかな五月雨の空[注五]（夏）

110歌は「胡蝶」の巻で、秋好中宮が里下りの折六条院の紫の上の御殿の庭を中宮が女房とともに遊ばれた際、その女房の一人が詠じた歌である。物語本文には、その女房名は示されていない。177178の贈答歌についても「花散里」の巻に存するが、やはりその名は記されていない。朧月夜尚侍と密通が露顕し、激怒した弘徽大后は源氏追放の謀議を進める。藤壺を思う気持なども重なり、源氏は厭世の気持が増さり、桐壺院の女御だった麗景殿のもとを訪れようとする。その途中川付近を通る時、以前一度だけ訪問したことのある女を思い出し手紙を遣わし、返歌を得た、その女である。

(2)「あさぢが露」…一首

二位中将にはへりける比ふちつほに立よりて女房に物かたりけるに月くまなくさしいて、ぬる、かほなれは

あさちか露の入道関白

1260数ならぬ袂も露のふかきには雲ゐの月のかけやとしけり

かへし　よみ人しらす

1261大空の月のひかりをやとしてもかこちかほなる露とこそき

け（雑二）

「風葉集」本文の詞書では「月くまなくさしいて、」とあるが、物語本文には「さしいりて」とある。藤壺で催された私宴だが、月も入り方となったので帝も中宮も室へ戻られた。中将（最終官職は入道関白）もその帰途、女房と歌のやり取りをする。この女房の名は、物語には宰相の君と明記されている。ただこの女房は、この場面にだけ登場し、物語の主題、構想に全くかかわらない人物である。

(3)「逢坂越えぬ権中納言」…一首

中宮のねあはせに　　よみ人しらす（ぁふさかこえぬ）

730君が世の長きためしにあやみ草千ひろにあまるねをそ引つる（賀）

中納言と三位中将が競う根合の後、歌合の場となった。この歌は、歌合の左の歌である。物語には講師名は示されているものの、歌の詠者名は記されていない。

(4)「はいずみ」…一首

をとこのこと女むかへんとしけるをみて山さとなるところへまかりけるにおくりのもの、いつくにとまりぬるとかいふへきといひけれは　　よみ人しらす（はいすみ）

975いつくにかおくりはせしと人とは、心もゆかぬなみた河まて（恋三）

夫に新しい女が出来たため、古い妻は昔の召し使いの女のもとに身を寄せることになった。馬に乗り、その召し使いの小さい家に着き、馬を返すべく夫の使いを帰した折の歌である。この妻は物語では、「事もかなはぬ人」「もとの人」「女」としか記されておらず、その名は分からない。

(5)「落窪物語」…六首

大納言たゝよりの七十賀をむすめの侍ける屏風のうた　　よみ人しらす（おちくは）

4あさほらけかすみてみゆるよし野山春やよのまにこえてきつらん（春上）

大納言たゝよりの七十の賀の屏風にさくらのちるをあふきてたてる人かけるところ　　よみ人しらす（おちくは）

72さくら花ちるてふことはことしよりわすれて匂へちよのためしに（春下）

大納言たゝよりの七十の賀屏風に子規をまてるところ　　よみひとしらす（おちくは）

139ほと、きすまちつる宵の忍び音はまとろまねともおとろかれけり（夏）

大納言た、よりの七十賀の屏風に山に雪たかくふれる家ある所　よみ人しらす

421雪深くつもりてのちは山里にふりはへてくる人のなき哉（冬）

大納言た、よりの七十賀のつゑのうた　よみ人しらす（おちくほ）

706やそさかをこえよときれる枝なれはつきてをのほれくらゐ山にも（賀）

大納言忠頼の七十賀の屏風にみな月はらへしたるところ　よみ人しらす（おちくほ）

759みそきする川せのそこのきよけれは千年のかけをうつしてそみる（賀）

この六首は詞書に記されている通り、女君の父中納言（最終官職名は大納言）の七十賀が盛大に催され、706歌以外はその折新調された一年十二カ月の絵と歌が描かれた屏風から抜き出されたものである。「風葉集」の部立通り、4歌は正月、72歌は二月、134歌は四月、421歌は十二月から引かれ、759歌は賀部の四季賀の配列に置かれている。706歌は屏風歌ではないが、同じ七十賀の際中納言に贈った鳩の杖に付されていた歌である。どの歌も、その詠者名は物語本文には示されていない、「よみ人しらず」である。

ただここで問題となるのは、この七十賀の月屏風歌が六首も「風葉集」に収載されていることである。既に樋口芳麻呂氏（注六）が御指摘なさっているが、「落窪物語」は「風葉集」に八首採られているが、その内六首がこの七十賀の折の歌であり、しかも他の二首も中宮と忠頼の四の君の歌で、男女主人公の歌を一首も収載していないのである。勿論「風葉集」散逸部に有する可能性はあるものの、そう考えても月屏風歌と長寿の鳩の杖に付された歌合せて六首という数は、「落窪物語」本内容とかかわりない場の歌だけに、多すぎると言わざる得ない。この「落窪物語」歌の取り扱い方については、後でまとめてみたい。

(5)「有明けの別れ」…二首

たいしらす　よみひとしらす（有明別）

1134君とはて幾よへぬらんあさち原はすゑの露の色かはる迄（恋五）

大将におはしましける時内大臣の入ける所をしのひて
かいはみ給けるにおとゝほとなく出にけれは女になつ
かしきさまにかたらはせ給ひて　有明のわかれの女院
1160袖かけてをりもみてまし梅の花人のしめゆふかさしならす
は
御かへし　よみ人しらす
1161しめゆひしむかしのかけのかれしより人も尋ねぬやとのう
めかえ（雑一）

1134歌は「有明けの別れ」の冒頭部に属し、物語本文では「女君、荒れゆる古里をつくづくとながめ給ふままに…」と書かれ、詠者は「女君」である。この冒頭部分の人物は、この後登場せず、しかも物語の内容とは無関係なのである。元来この冒頭部については種々の位置付けがなされている。(注七)「風葉集」においても詞書は「題しらず」となっており、手掛りとはなり得ない。（「題しらず」歌については後述する。）ただ是までの「よみ人しらず」歌について、物語中の詠者名と照らし合わせると、人物名未詳か或は物語でその場面しか登場しない人物と考えるのが妥当であろう。

1160 1161の贈答歌は、女院がかつてて男装して大将として出仕していた頃、姿を消す隠れ蓑の術を心得ていて、三位中将（最後官職名は内大臣）が忍ぶ草の生い茂る三条の女の家を訪れるのを垣間見る、女は久し振りの訪問を喜ぶが中将の心は次に会う中務卿宮北の方に移っており、中将は言繕って立ち去る、泣崩れる女に大将が慰めた折の歌である。この女は、物語で「女」としか示されていない。後にその娘が左大臣と結ばれるが、その場でも「母君」とし、名は記されていない、「よみ人しらず」である。

以上現存物語のみ調査すると、どの物語歌もその詠者は名が伝わっていない人物、或はその場面しか登場しない女房、女君などである。これは「風葉集」現存部に属する「よみ人しらず」歌の約半数に当たる、また散逸物語歌についても、次の「まよふ琴のね」「あらば逢ふよのと嘆く民部卿」歌などは、

わかのうらの柳をよめる　よみ人しらす まよふきんのね
57きしちかみ露も浪もたちよれはみたれすみゆる青柳の糸
（春上）

わかのうらにて花のちるをよめる
よみ人しらす まよふきんのね
117咲にほふきしのさくらはうら風にちりても花の浪とこそな
れ（春下）

院姫宮の根合のうた　　よみ人しらず（あらはあふよ）

168君か世にひきくらへたるあやめ草これをそなかきためしとはする

169あやめくさかゝるたもとのせはき哉まにしらぬまの深きねなれは（夏）

宴席や根合の折の歌と考えられ、「逢坂越えぬ権中納言」と同様歌合の詠者名は、物語では示されていないのであろう。こう考えると「風葉集」の「よみ人しらず」の表記はそのまま物語本文でその歌の詠者名が知られないことを示していると見て差支えないのではないだろうか。

○「題しらず」歌について

「風葉集」には、また数多くの「題しらず」歌が存する。この数を判定するのが困難で、神野藤昭夫氏は、「題しらず」と表記された例を五十四例、更に詞書では何も示されていないものの前歌の「題しらず」に続くと考えられる例を二十一例、合わせて七十五例とされている。拙者は七十八例とし、この中には詞書の脱落が四首程存するのではないかとした。現在の「風葉集」本文自体末尾だけでなく大小数箇所の脱落・散簡が存し完全ではないので正確な数値は断定し難く、この両者から七十五首程度としておきたい。この中で現存物語歌は十七首（但し、現存物語でも散逸部分に属する歌三首を含んでいる）である。（注九）「風葉集」全体の「題しらず」歌からすると四分の一弱の割合であるが、この現存物語歌から糸口を見つけて行きたい。（「源氏物語」四、「狭衣物語」一、「夜の寝覚」三〈うち二首は散逸部分に属す〉、「とりかへばや」一、「有明けの別れ」一、「風につれなき」二〈うち一首は散逸部分に属する〉、「うつほ物語」四）

(1)「源氏物語」…四首

（たいしらす）　　六条院御歌

201よるをしる螢をみてもかなしきは時そともなき思ひ也けり（夏）

（たいしらす）　　夕霧の左大臣

287さよなかに友よひわたる雁かねにうたて吹そふをきのうは風（秋下）

たいしらす　　むらさきのうへ

1128身にちかく秋やきぬらんみるまゝに青葉の山もうつろひにけり（恋五）

たいしらす　　うきふねの君

1367身をなけし涙の川のはやきせにしからみかけて誰かと、めし（雑三）

201歌は夏の部に属する。詞書は記されていないものの、その前に位置する散逸物語「左も右も袖ぬらす」歌の詞書「題しらず」を受けていると考えられよう。「物語二百番歌合」の「後百番歌合」七十一番にも採られている同歌は、「むらさきのうへかくれたまひてのち、ほたるのとびかふを御らむじて」（注1）と詞書が示されている。物語場面に返すと、紫の上の死後蛍が飛ぶのをみて光源氏が自らの悲嘆を独詠したものである。物語本文に暦日は記されていないが、「いと暑きころ、涼しき方にてながめたまふに」「蛍のいと多く飛びかふも」とあり、「風葉集」での前後の配列と矛盾はみられない。詠者光源氏が最愛の妻紫の上を失った悲痛な嘆きの込められた場面であろう。

267歌は夏部の二首目に置かれており、この歌も前歌266「風につれなき」の詞書「たいしらす」が掛っていると思われる。物語では「少女」の巻に存し、雲居雁の父内大臣の怒りに触れ、夕霧は同じ邸内に居ながら雲居雁に会うことができない。一晩中嘆き明かした夕霧がその苦しい胸の中を独白した歌である。物語場面に暦日は示されていないものの雁の鳴き渡る姿が描かれ、「風葉集」の季節配列と一致しているのに「題しらず」なのである。「後百番歌合」七十四番として載せられている同歌には、「三条宮にもろともにおひいで給ひしに、人しれぬものおもひつきそめてよもすがらなげきあかし給ひしに女ぎみ、くもゐのかりもわがごとやと、ひとりごち給ふをききて」と長文の詞書が付されている。

1128歌は、四季を巡る恋歌が収載されている恋五部に並べられている。源氏に女三の宮が降嫁されることになり、婚儀の後紫の上からすると三日の夜離れが続く、その苦しい心情を手すさびに書いた歌がこの歌である。「後百番歌合」七十三番に存する同歌の詞書は、「女三宮六条院にわたりたまへりしころ御手ならひに」とある。この歌は「風葉集」恋五部の秋の配列に置かれているが、物語本文では暦日や季は明確に表されていないが、晩夏の頃と思われる。歌に「秋」と「飽き」が掛けられており、身に近く秋が来たので私も飽きられる時になったのかしら…という意で、「秋」に並べられたのであろう。紫の上の独り味わう、深遠とした悲しみが込められた歌である。

1367歌は、世を厭い海山を漂泊する―無常の歌が集められている雑三部に属している。「百番歌合」九十番の詞書「心ならでながらへて」と示されている通り、薫と匂宮の両者から言寄ら

れた浮舟は、思い余って宇治川に身を投げる。しかし心ならずも救い出され意識を取り戻した浮舟は、ただ今の心境をすさび書きに書いた歌である。以上物語展開上読者の哀れを誘い、その詠者の苦悩に共感し得る歌が多い、四首とも「物語二百番歌合」に採歌されている歌であることも、共感を得た歌故であろうか。

(2)「狭衣物語」…二首

たいしらす　　さころものみかとの御歌

1084 こゑたて、なかぬはかりそ物思ふ身はうつせみにおとりやはする（恋五）

たいしらす　　さころものみかとの御歌

1120 しきたへの枕そうきてなかれける君なきとこの秋のね覚に（恋五）

1084 1120 両歌とも、四季の恋歌を収めた恋五部に並べられている。1084歌はその中でも、夏の部分「空蟬」として配列されている。「百番歌合」十九番の詞書に「なつころ源じの宮の御まへにて、こずゑのせみのなきいでたるをきかせ給ひて」とあるように、源氏の宮と母大宮が碁を打つところに赴いた狭衣大将だが、源氏の宮はそれとなく姿を隠されたので、しかたなくこの歌を口遊びに言い紛らわしたのである。源氏の宮への思い捨てきれぬ狭衣が、苦しい胸中を吐露した歌である。

1120歌は、恋五部の秋の部分に位置している。物語本文においても「さまざま思しやるに、人悪く恋しくともおもひ出で給ひて、秋にもなりぬ」と記されており、配列上の矛盾はみられない。狭衣が飛鳥井の姫君の失跡を知り、姫君の面影を追い求めながら咲いた独詠歌である。「百番歌合」六十三番の詞書には、「あすかゐの君ゆくへなくなりてのち」と簡潔に説明してある。両歌とも狭衣大将の悲痛な叫びが聞こえて来るような歌である。ともに「物語二百番歌合」に採られた歌である。

(3)「とりかへばや」…一首

たいしらす　　いまとりかへはやの太政大臣四君

48 春のよもみる我からの月なれは心つくしのかけとなりけり（春上）

男として育てられた権大納言（後に左大臣・関白に昇進）の姫君は、表向き若君として出仕し中納言まで進む。右大臣（最終官職名は太政大臣）四の君と結婚するが、表向きの夫婦であり四の君は苦悩する。ある春の夜、その満たされぬ思いを独り詠じた歌がこの歌である。この歌は「無名草子」にも評されて

いて、

四の君ぞ、これは憎き。上はいとおほどかにらうたげにて、

春の夜も見る我からの月なれば心づくしの影となりけり

と詠むも、何事のいかなるべしと思ひて、さばかりまめに、

分くる心もなき人を持ちながら、心づくしに思ふらむと思ふだに、おいらかならぬ心のほど、ふさはしからぬを……(注十一)

とある。「こころづくしに思ふらむ」と論じているように、四の君の苦悩に満ちた歌であろう。この物語場面は、この時その悩む四の君の美しい姿を垣間見た宰相中将は心動かされ、四の君と密通、そして不義の子出産…と物語が大きく展開する契機となる重要な場面である。この歌は春上部に収められているが、物語では「その年もたちかはり、ついたちごろ」「月のあかき夜」「花（梅）のかげ」の映る頃と記され、物語本文と「風葉集」の配列は、暦日的展開から鑑みると多少時間的なずれは存するものの、「梅」「月」では前後の配列と一致している。

(4)「夜の寝覚」…三首（但し、二首は散逸部分に属している。）

（たいしらす）　　ねさめの左大将(注十二)

1185うき世には我すみ陀ぬ郭公しての山ちのしるへやはせぬ

（雑一）

たいしらす　　（ねさめの広沢の淮后）

1271ありしにもあらすうき世にすむ月の影こそみしにかはらさりけれ（雑二）

たいしらす　　ねさめのひろさはの淮后

1400世の中にふれはうさのみまさりけりいつれのたに、我身すて、ん（雑三）

物語内容順に解説を加えると、雑二部に属している1271歌は、姉の夫大納言（後関白に昇進）の子を秘に産んだ中の君（寝覚の上、最終官職名は淮后か）は、周囲の様々な中傷に居たたまれなくなり、父入道の住む広沢に隠棲することにする。大納言はそんな中の君を恨み、文を遣わすが中の君は取り合わない。しかしさすがに故郷を思い独りで詠じた歌がこの歌である。雑二部の「月」の歌群に属し、配列の上で違和感はない。

1400歌は「風葉集」では雑三部に置かれているが、物語では中間欠巻部に存すると考えられている。「題しらず」として掲げられ、また同歌に関する他の資料もないので、この歌を含む場面の内容は明確さを欠くが、中の君が年齢の隔った大将（後関白に昇進）のもとに嫁ぐことになり、婚儀の直前、わが身の不幸を深く詠嘆した歌であろうと推測される。独詠歌かどうか判断し難いが、歌の内容からして周囲の者に心中を漏らすわけに

もいかず、独り詠じたように思えるかどうか。

1185歌は、前の1184の散逸物語「ひちぬいしま」歌の「題しらず」の詞書を受けているものと思われる。物語の末尾欠巻部に属していたと推定される歌で、「寝覚物語絵巻」にも残されている。冷泉院が寵愛しておられた女三の宮と深い仲になったまさこ君（最終官職名は右大将）だが、冷泉院の知るところとなり院の激しい怒りを買う。院は女三の宮を具し大内山に移られ、まさこ君は女三の宮と会えない日々が続く。女三の宮の侍女の中納言の君が里下りしたことを聞いたまさこ君は、忍んで中納言の君のもとを訪れ絶望的な気持を訴えたのがこの歌であろうとされる。ただ「寝覚物語絵巻」には中納言の君の返歌が記されており、独詠歌ではないようだ。歌内容には死をも覚悟する響きが感じられ、苦悩に打ちひしがれたまさこ君の姿が浮び上がる。苦しい胸中を思わず吐露し、返歌を期待したというより中納言の君がまさこ君に同情し歌を返した…という場であったかもしれない。

(5)「風につれなき」…二首（但し一首は散逸部分に属している。）

たいしらす　　風につれなきのおほきおほいまうち君

236雲ゐ行雁のねにさへいかなれは物思ふ袖はかゝるなみたそ

（秋下）

たいしらす　　風につれなきのよしの、院御歌

358むしの音も秋はてかたの草の原かれはの露はわかなみたかも（秋下）

236歌は、秋下部巻頭歌に置かれている。関白の姫君に恋焦がれる権中納言（最終官職名は太政大臣）だが、姫君のつれない態度に嘆き、独り中門のもとで詠じた歌である。物語場面に暦日は示されていないものの、雁の鳴き渡る姿が描かれており、「風葉集」での配列と一致している。この歌もやるせない心境を、「雁の音」に託して独り詠じたものであろう。

「風につれなき」物語は、「風葉集」に四十五首もの歌が選入されている。「源氏物語」百八十首・「うつほ物語」百十首・「狭衣物語」五十六首に次いで第四位もの歌数であり、鎌倉時代ではかなり著名な長編作品であったろうと推測される。だが残念なことに、現在最初の一巻に相当する部分しか存せず、この数倍もの内容は「風葉集」所載歌から推定するしか方法がない。この358歌も散逸部に存しており、現存部分では今上帝として登場する吉野院が詠じたものである。出家して吉野山に籠る前か後か、いつ何処で詠じられたか判断できない。歌内容からすると、荒涼たる地或は墓地を暗喩する「草の原」と、「枯葉

の露は我が涙かも」が詠み込まれ、何か涙するような嘆きの場であったらしい。独詠歌か贈答歌かは全く分からない。

(6)「うつほ物語」…四首

たいしらす　　うつほの参議すけすみ

469めにちかくおりていのれとかすかの丶もりの榊は色もかはらす（神祇）

たいしらす　　右大将仲忠

580たひ人のひもゆふくれの秋風は草の枕の露もほさなむ（羇旅）

581色そむる木のは丶まきて旅人の袖にしくれのふるそわひしき（羇旅）

たいしらす　　うつほの侍従なかすみ

1037人を思ふ我身のたまはなからなんむなしきからはなけきしもせし（恋四）

469歌は、神祇の部に収められている。歌中に「かすかのもりの榊は色もかはらず」と詠み込まれ、春日大社にかかわる歌として並べられているが、物語本文に返して読みと実際中将祐純が春日大社に参詣した折の歌ではない。右大将兼雅の消息文に掛けての歌であり、神祇の場面は見られない。前歌468「狭衣物語」の下句「もみちの色もしるくみえたり」と「もりの榊は色もからはず」と「色」の共通で、選ばれて置かれたのではないかと思われる。従ってこの歌は今まで検討してきた詠者の嘆きや苦悩が込められた「題しらず」歌と異り、「風葉集」撰集で歌を並べる際、配列を優先させるべく利用された歌であろう。それ故、詞書を記し難く「題しらず」としたのであろう。

580581の両歌は、羇旅部に収められている。「うつほ物語」歌の中に旅の歌ではないのに羇旅部に並べられていることは既に田中新一氏（注十二）によって指摘されており、また拙者も羇旅部の分析で考察（注十四）を加えた。580歌は「内侍のかみ」巻中のもので、七月下旬に催された相撲の節会の後の管弦の宴に際し、仲忠が藤壺に隠れあて宮を前にして詠んだ歌である。あて宮との贈答から「日もゆふぐれ」と「紐結ふ」を掛け、独り寂の自分を旅人にその涙を露に譬えたものである。581歌は「嵯峨の院」巻中に存し、九月廿日の夜仲純と夜一夜物語などして夜を過ごした折詠んだものである。この前後の配列は、逢坂の関から東へ下る様並べられており、この歌は物語場面からするとその途には該当しない。羇旅部配列は前半、逢坂の関から関東へ下る様その路程を示す地名の順に歌を置いていったが、途中その旅程の地として配せる物語歌が見当たらない。そこで苦肉の作として「う

つほ物語」のこの二首を歌語からして選び出し、「題しらず」として並べたのではないだろうか。581歌は源正頼邸での外泊の歌なので「旅人」と解釈されるが、「うつほ物語」本文ではほとんどの本文が第三句「捨て人の」と記されている。「捨」を「旅」と誤写したとも考えられるが、配列から鑑みると「旅人」の方が580581と連続しスムーズである。どちらにしてもこの二首は配列を展開させる上で利用された歌と言えるのではないだろうか。

1037歌は、相手の心変りを嘆き、昔ての夢のような逢瀬を思い、巻末では入水する女君の歌で終結する—恋四部に置かれている。物語場面に返すと「藤原の君」巻末で、侍従仲澄が他の懸想人とともにあて宮に思いを訴える場面であるが、この歌の数行前から秋の季節が突然夏の季となっており、錯簡か誤脱がみられる箇所である。この歌の「風葉集」での配列は、

こゝろならすへたゝりてあひかたくなりにける女にや
まひにわつらひけるころつかはしける　おやこの中の内大臣

1030さりともと思ふはかりにかけとめし命も今はかきりなりけり

心ちかきりになりて侍けるに女院しのひてわたりおはしましたりけれは聞え侍ける　いはてしのふの一条院内大臣

1031こと、へよ恋もうらみもはれやらて誰故ならすやみにまとは、

みかとにはつかにみえ奉りて侍けるのちこゝろならぬことのありぬへかりけるを思ひわひてよをそむきて侍けるかかきりのさまにさへなりにけれは内わたりにさふらひける人につかはしける　みかきか原の前左大臣三君

1032そむけとも此世なからはわすれぬに身をかへてこそなくさみもせめ

このふみをみかとにみせたてまつるとて　ふちつほの中納言

1033夢にたにしらぬもかなし君にこそわきてかくへき露のかことを

ときはにしのひてすみ侍けるにこゝちかきりになりてあすかゐ

1034なからへてあらはあふよをまつへきに命はつきぬ人はとひこす

ねさめのひろさはの准后こゝろにもあらすおい関白に

むかへられてなけき侍けるころわか関白の夢にみえ侍りけるうた

1035 物思ふにあくかれいて、うき身にはそふたましひもなくなくそふる

宣旨ゆくへしられ奉らすなりてのち「今はむなしきからとしらすや」と聞ゆると御ゆめに御らんして

心高きの後冷泉院御歌

1036 恋わひてまとふわかたまことならはむなしきからの行へ尋よ

たいしらす　うつほの侍従なかすみ

1037 人を思ふ我身のたまはなからなんむなしきからはなけきしもせし

あひかたかりける女のあたりなる人にいひ侍ける

あまのかるもの権大納言

1038 袖のうちに浪よせかくるうつせ貝むなしきからに成や果なん（〜〜線筆者記）

しのひて物申ける女のこと人にさたまりぬへく聞侍りけれは

うきなみの権中納言

1039 この世にて絶はてぬともみつせ川今一たひのあふせあらしや（〜〜線筆者記）

である。恋四部巻末に近い箇所で、五首前の1031歌では詞書に「心地限りになりて」、1032は詞書に「限りのさまになりにけれは」と記され歌中に「身を換へてこそ」とある。1034の「狭衣物語」歌では飛鳥井の姫君の辞世歌で、詞書に「心地限りになりて」、歌に「命は尽きぬ」と詠み込まれている。1035 1036歌は魂が身から離れた内容の歌であり、この1037「うつほ物語」歌は、歌中に「我が身の魂はなからなんむなしきからは」と詠じている。次の1038歌では「むなしきからに成や果てなむ」、そして次の1039散逸物語「あまのかるも」歌ではこの世とあの世の境界である三途の川を示す「三頼川」が詠み込まれている。心地限りとなり、命尽き、魂は身から離れ、我身はむなしき殻となり、魂は三途の川を渡りあの世へ…という配列になっていると考えられよう。この様な歌の並べ方からすると、この1037「うつほ物語」歌を物語に返した場合、いささか配列上の位置とそぐわないと思われ、「題しらず」の詞書もそれ故かと推論されよう。この歌も配列のために利用された歌の可能性はある。ただ、「うつほ物語」のこの場面は、本文に誤脱か脱落が存した箇所であり、「風葉集」編纂当時もそうであれば、或は錯簡・誤脱を示す「題しらず」とも考えられ、今のところ断定はできない。

(7)「有明けの別れ」…一首

たいしらす　　よみ人しらす 有明別

B34 君はとて幾よへぬらんあさち原はすゑの露の色かはる迄

この歌は「よみ人しらず」歌の頃でも述べた通り、「有明けの別れ」冒頭部のきみ□(千明)の大夫と女君との有明けの別れの場面で、女君の詠じた歌である。このきみ□(千明)の大夫に相当する官職名の人は後に登場しないし、またこの「よみ人しらず」の女君に該当する人物は後の部分には出て来ない。従ってこの冒頭部分の位置付けに関しては、先学の諸先生方(註十五)により議論が重ねられてきた。大槻修先生が、「筆致・手法の上で他の部分と異質のものとはいえず、同一筆者の手になったと思われる」(註十六)と述べておられ、また「物語の序文とみなし、『恋の一見本』としてのある場面を描いたものか。後文との接点になるこの箇所は、何となく落ち着きが悪い。脱落・誤綴などの事情あるか」(註十七)とされている。

この冒頭部はこの女君が再びの訪れを待つうちはや九月も暮れ、有明け月のもと別れた男君（きみ□(千明)の大夫）の姿を思い出し、物思いに沈みながら独り詠じた歌である。独詠歌であり、しかも自らの悲嘆を詠じた歌であることから、今までの「源氏物語」「狭衣物語」等の「題しらず」歌同様、物語展開上読者の哀れを誘う歌と思われ、それ故の「題しらず」と考えられよう。しかも「風葉集」の四季恋を収めている恋五部の晩秋の部分に並べられており、物語場面の「待ち出づる長月の暮は」の文章と一致し配列上問題はみられない。「題しらず」という詞書を付けることによって、詠者の苦悩・悲嘆を推し量らせようとする手法か。ただこの歌の詠者は「風葉集」編纂時においても名が判名しない、その場面だけに登場する女房などと同様主要人物でないと考えられる。そうするとこの部分「風葉集」成立時点でも理解困難な状態にあったという大槻先生の御説(註十八)の通り、錯簡・誤脱故の「題しらず」と詞書が示されたとも考察でき、この歌についても007の「うつほ物語」歌と同様結論は出せない。

以上「風葉集」収載の「よみ人しらず」「題しらず」歌について考究してきた。まず「よみ人しらず」歌については、現存物語歌は二十八首中十三首と約半数であるが、どの歌も物語に返した場合、名の示されていない或はその場しか登場しない女房など名を伝えるに価しない人物と考えられ、その詠者名表記そのまま名の伝わらない人と考察して差し支えないのではない

かと思われる。

次に「題しらず」歌であるが、少なくとも二種以上の区別があると考えられる。一つは、各物語において詠者が自らの苦悩・悲哀を詠嘆した歌で、物語の展開上読者の哀れを誘う場で、「題しらず」と詞書することによりその意を読み手に推し量らせようとするもの。これは詠者が独り苦悩し、その心中を吐露した歌故独詠歌が多く、一首「夜の寝覚」の末尾欠巻部に存すると考えられる1400歌のみ贈歌であるものの、これも歌内容から返歌を期待したと言うより、周囲に居た中納言の君が同情し返歌したとも考えられよう。どちらにしてもこれらの歌は、物語においての詠者の苦悩や悲嘆に共感し得る歌ばかりである。

二つめとしては、各部の範疇に入らない或は物語本文に返した場合、「風葉集」中の前後の配列と物語場面の間で矛盾が見られるものである。これは配列し歌を並べる際物語内容とは関係なく、その歌語などから利用された歌と論究でき、現存物語歌としては「うつほ物語」歌の三首（乃至は四首）について断定できると思われる。消息文中の歌であり神祇の場を持たないものの、歌語「かすがのもり」故神祇の部に並べたり、旅中のしかも逢坂の関から関東へ下る途の地での歌ではないのに、「旅人」という歌語から羇旅部に置かれている歌等計三首である。もう一首物語本文に誤脱が存すると考えられる部分ではあるが、「むなしき殻」という語が含まれているため、命果てる歌の後に位置する1037歌も疑わしい。ただこの1037歌と「有明けの別れ」冒頭部に存する1134歌は、誤綴・錯簡のある箇所故「題しらず」とされた可能性もあり、この分類も二種以上とした。

「風葉集」に「題しらず」歌は七十五首程度あり、現存物語歌はその四分の一程度であるため、或は別の意を持つ「題しらず」歌も考えられよう。

ここで問題となるのは、配列のために利用されたと思われる歌が「うつほ物語」歌だけに集中していることである。既に「よみ人しらず」歌の頃でも蝕れたが、「落窪物語」の屏風歌が六首（鳥の杖に付されていた一首も含め）も「風葉集」に採られ、しかも「落窪物語」の「風葉集」収載歌は八首しかないという事実である。他の二首も中宮及び忠頼四の君の歌で、男女主人公の歌を一首も収めていないのである。樋口氏はこの点に関[注十九]して、

『風葉集』の『落窪物語』を担当した女房は、物語の読解力にやや欠ける女房であったかもしれない。また秀歌を選ぶことに関心が強いためか、物語に即して男女主人公の歌を多く選ぼうと努めていない点、他の物語担当者とはかな

り選歌態度を異にしているように見受けられる。

と述べておられるが、この「選歌態度を異にしているように見受けられる」は注目すべき御見解である。この「落窪物語」の月屏風歌五首と長寿祝いの鳩の杖に付されていた歌の計六首も利用された歌と考えたい。撰者が配列を考え、その主たる構想に立ち歌を並べるに当り、どうしても配列の主となる歌と従となる歌が存するのは仕方がないと思われる。配列をスムーズに展開させるに以上、また勅撰集の型を踏襲する上にも足りない歌が出て来るであろう。どうしてもその配列の空白を埋めるべく利用する歌が必要となってくるのではないだろうか。しかも個人が詠んだ歌を集めた勅撰集とは異り、物語の登場人物が物語場面で詠んだ歌のみを集めた物語歌集故歌を選ぶに当り、自と限界があろう。そのため「うつほ物語」の469 580 581(1037)歌、「落窪物語」の42 134 421 706 759歌は必要であったと思われるのである。だが「うつほ物語」「落窪物語」の両物語歌のみが利用されたと決めるのは無理があろう。「源氏物語」や「狭衣物語」歌でさえ、部の範疇から外れているという程ではなくても、配列上の位置と物語に返した場合、些少な矛盾を有する歌が存することは今まで幾つか指摘(注二十)した。その取り扱われ方に差がある——と表現した方が適切かと思われる。あれ程多くの物語について論評している「無名草子」においても、「うつほ物語」は、

『源氏』より前の物語ども、『宇津保』をはじめてあまた見て侍るこそ、皆いと見どころ少く侍れ、古代にし古めかしきはことわり、言葉遣ひ・歌などは、させることなく侍るは、『万葉集』などの風情に見え及び侍らぬなるべし……

と評される程度で、その内容についても「させることなく」と言い切っている。「落窪物語」に関してはその名さえ見出せないのである。以上の当時の評価等を鑑みると、この「うつほ物語」「落窪物語」は利用しやすかったのではないだろうか。当時の人々にとっては「古めかしき」作品として馴染薄く、配列の空白を埋めるのに使いやすかったのではないだろうか。特に「うつほ物語」歌では、「菊の宴」巻の大后六十御賀の十二カ月の絵屏風の歌十二首中七首が、「風葉集」に採られている点や、賀部の約三分の一が「うつほ物語」歌で占められていること。更に賀部巻末に存する大菅会屏風歌群を模したと考えられる小歌群四首は、「うつほ物語」の嵯峨院大后六十賀の屏風歌から三首、「落窪物語」の中納言忠頼の七十賀の月屏風歌から一首で構成されていることも傍証となろう。勿論この二物語は、現存物語で考えた場合浮び上ってきたのであって、散逸物語まで拡大すると、もっと多くこの様に利用された、いや扱い方に

差異のある物語は存したであろうと思われる。

まとめ

「風葉集」においての「よみ人しらず」歌は、歌の詠者名が物語中に示されていない、或はその場だけの登場人物で、本筋とは関係ない人物の詠んだ歌であろうと想定される。

「題しらず」歌は少なくとも二種以上分類され、一つはその詠者が苦悩し独りその悲嘆の心情を詠じた歌で、読み手にその気持を推し量らせようとの配慮から、詞書を「題しらず」と示したと考究できるもの。もう一つは、物語場面においてはその属している部の配列と一致しないものの、配列の展開を潤滑にするために歌語を利用すべく歌を並べ、「題しらず」と記したもの。そして更に追け加えると「風葉集」編纂当時既に散簡・脱落等を有していたかもしれないという場面から選び出された歌も考えられよう。特に利用された歌は、現存物語では「うつほ物語」「落窪物語」が推察され、「風葉集」の物語の取り扱い方に差異があったと論究できるのではないだろうか。

〈付記〉

本稿は、平成四年一月の名古屋平安文学研究会（於　椙山女学園大学短期大学）で口頭発表したものに、補訂加筆したものです。席上、貴重な御教示を賜りました諸先生方に厚く御礼申し上げます。

〈注一〉『散逸物語の研究　平安・鎌倉時代編』　昭和四十八年　笠間書院。

〈注二〉「題号」『在明の別の研究』　昭和四十四年　桜楓社。

〈注三〉「散佚物語『ちぢにくだくる』の復原―〈しのびね型〉物語群の一翼として―」平成三年三月　『跡見学園女子大学国文学科報』第十九号。

〈注四〉大槻先生は〈注二〉で、二十六首とされるが、578 579の散逸物語歌が含まれていないと思われる。この二首には物語名が記されておらず、前歌577の散逸物語「のじま」の歌かと考えられるが、断定はできない。

〈注五〉「風葉集」本文の引用は、中野荘次・藤井隆氏『増訂　校本風葉和歌集』（昭和四十五年　友山文庫）に依る。

〈注六〉「『風葉和歌集』の入選歌―『竹取物語』『落窪物語』を中心に―」　『鈴木弘道教授退任記念　国文学論集』　昭和六十年　和泉書院（奈良大学文学部国文学研究室）。

〈注七〉小木喬氏『鎌倉時代物語の研究』　昭和三十六年　東宝書房。　田中熙宮子氏　「有明の別研究（一）」　昭和三十四年七月『平安文学研究』第二十三輯。大槻修先生〈注二〉参照など。

〈注八〉〈注三〉参照。

〈注九〉神野藤氏は、〈注三〉で現存物語と重なる「だいしらず」は十五例、うち二例は欠巻部分の歌とされるが、この数値には「風につれなき」物語の歌が含まれていないのではないかと考えられる。

〈注十〉「物語二百番歌合」の引用は、「新編　国歌大観」に依る。

〈注十一〉「無名草子」の引用は、桑原博史氏校注『無名草子』（新潮日本古典集成　昭和五十一年）に依る。以下同じ。

〈注十二〉丹鶴業書本「左大将」と記されているが、他の表記等から「右大将」の誤写と考えられる。

〈注十三〉「中世における物語論—源氏評論の基底をなすもの—」『国語と国文学』　昭和二十八年四月。

〈注十四〉「風葉和歌集の構造—羇旅部について—」『平安文学研究』第七十三輯。

〈注十五〉〈注七〉参照。

〈注十六〉〈注二〉参照。

〈注十七〉『有明けの別れ—ある男装の姫君の物語—』　一九七九年　三省堂。

〈注十八〉〈注二〉参照。

〈注十九〉〈注六〉参照。

〈注二十〉拙稿「『風葉和歌集』の構造—秋部（上・下）について—」（『論叢』平成三年一月）。拙稿「『風葉和歌集』の構造—恋一部について—」（『甲南国文』第三十九号　平成四年三月）など。